

鶴の笛

林芙美子

青空文庫

昔、ききんのつづいた年がありました。その村には鶴が大変たくさんいました。鶴たちは毎日、たべものを探して歩きましたけれど、どこにもたべものがないので、気の早い鶴はみんな旅仕度をして遠くへ飛んでゆきました。

すると、足の悪い鶴と、そのお嫁さんだけが、その村へのこることになりました。足の悪い鶴は、みんなのいなくなつたさびしい沼地のふちの葦のしげつたところに立ってみんなが飛びたつて行つた空をみていました。

ある日、鶴のお嫁さんは水ぎわのなかを、一生懸命くちばしでたべものを探していました。小魚でも一ぴきぐらいないかしら、

どじょうでもいい、もう、今朝はさすがにふらふらになって一生懸命、あっちこっち探していました。朝陽がきらきら光って広い空に浮雲が一つ西の方へゆるく流れてゆきます。若木の林のなかは、ところまだらに陽の光が煙っていて美しい景色でした。

すると、しばらくして、何ともいえない美しい笛の音色がきこえました。おや、何だろうと思いました。いままでおなかのすいていたお嫁さんの鶴は、ふっとおなかのくちくなるような気がして、その美しい笛の音色をきいていました。

そおつと笛の音のする方へ歩いてゆきますと、足の悪い鶴が横笛を吹いていました。

「おやおや、あなたが笛を吹いていたのですか。」

お嫁さんの鶴がたずねました。

足の悪い鶴ははずかしそうにふりかえって、

「さつきね、何かないかと思つて沼のなかを探していたのさ。そしたら、カチンと固いものがくちにさわったので、あわててくわえたらこの笛だったのよ。何だろうと思つてね、いろんな風にくわえていたら、ふつと竹の小さい穴からきれいな音がしたのさ、もう、おなかのすいたのも忘れて、これを吹いていたのさ：：。」

「まア、そうでしたの、とてもきれいな音色でびっくりしました。何だか、昔のたのしいころのことがうかんで来て、とても気持ちがよくなりましたわ。」

笛の音色があまりきれいなので、おなかのすいた二羽の鶴はい

ままで食べることをばかり考えて、いつもくよくよしていたことが馬鹿々々しくなりました。

自分たちを置いて勝手に飛んでいってしまったたたくさんの鶴たちを恨んで、ふたりは毎日ぐちばかりいっていましたが、笛をひろつてからは、笛の音色があんまりきれいなので、二人はとぼしい食べものに満足して、お話しをすることは、たのしかつたおもい出話や、遠くに行つた鶴たちが幸福であればいいという話ばかりになりました。

「ねえ、わたしは、笛の音色をきいていると、こんなみじめな年ばかりじゃなく、いまに、とても豊年のつづくいい年も来るような希望が出来て、すこしもがっかりしなくなりました。今日はす

こし、ちよつと遠くまでお魚をさがして来ますから、時々、その笛を吹いて下さいね。」

お嫁さんの鶴がいました。

「ああいとも、けがをしないように行つておいで。」

お嫁さんの鶴はすぐ飛び立つて行きました。しばらくすると、小さい沼のところへ来ました。沼の上に時々水しぶきがしています。おや何だろうとねらいをつけて飛びおけると、いままで見たこともないたくさんの小魚が群をなしているところがありました。お嫁さんの鶴は胸がどきどきしてその魚をとりました。さつそく、おみやげをつくつて笛の音色の方へ旅立ちますと、西の方から、子供の鶴を三羽もつれた夫婦の鶴にいました。

「おやまア、随分久しぶりですね。どうしたんですか……。」

お嫁さんの鶴がたずねますと、

「ええひどいめにありましたよ。どこへ行つてもいいことはなく、とうとう、私の子供はふたりとも病気で死んでしまいました。どこか、いいところはないかと思つて、方々さまよつているところへ、何ともいえないきれいな笛の音がするので、きつと、あの笛の鳴る方にはいいことがあるにちがいないと思つて、やつて来たのですよ。」

と申しました。

「まア、そんなに笛の音が遠くまできこえるのでしょうか。あれは、足の悪いうちの主人が吹いているのですよ。」

お嫁さんの鶴の案内で飛んでゆきますと、自分たちのみすてた村だったのでびっくりしました。お嫁さんの鶴は、笛の音色を長いあいだきいていましたので、心のなかがひろびろしていて、どんなに自分たちが困っていても、ほかのものにほどこしをするのは気持のいいものにおもうようになっていました。

さつそく、さつきとつてきた魚を夕食に出して、旅づかれのした、おなかのすいている鶴たちに食べさせてやりました。

足の悪い鶴も、お嫁さん鶴も、ほんの少したべたきりで、

「遠慮しないでおあがりなさい。たくさん食べて元気を出して行って下さい。」

と、しきりにすすめましたので、鶴の親子は涙ぐんでしまいま

した。たったこの間までは、みんなたべものをかくしあって、自分たちのことばかり考えていた鶴たちは、よるとさわるとたべものけんかで、なかではおたがいにだましたり、きずつけあったりして、血なまぐさいことばかりで、鶴たちは、食べものの事といつしよに精神的な心配で、今日はたのしいという日は一日だつてありませんでした。

みんな、がやがやと群をなして、弱いものをおびやかしては、少しのたべものもとりあげて強いものがいばつているのです。

鶴の子供たちも、自然に気持がすさんで、おとなの悪いところばかりまねるようになって、きたない言葉づかいで、けんかばかりしていたのです。あんまりききんがつづいたので、みんな村を

すてて行ってしまいましたけれど、いまはかえって、以前より平和になり、七羽の鶴は、どんなことがあっても、のぞみをすてないで、ここで元気に働いて暮らしましょうと話していました。

鶴のお嫁さんの案内で、魚のたくさんあるところをみつけましたので、七羽の鶴はしつそな気持で、いつもたのしい食事をすることが出来ました。

ある夜、あんまり美しいお月夜で、金色の光が、こうこうとあたりをてらしていますので、足の悪い鶴は、また笛を吹きました。三羽の子供の鶴はお月様へむかって、歌をうたいたくくなりました。

「きれいなきれいなお月さま了。」

小さい鶴が歌いました。すると中の兄さんの鶴が、「生れた村がいちばんいい。」と歌いました。上の兄さんは、「きもちのいい夜だね。何を考えてもたのしいね。」と歌いました。

子供鶴のお母さんはのんびりとして、

「ほんとに、わたしたちはしあわせになったのね。お前たちががつしなくなっただけでもかえって来てよかった。乙さんも甲さんもみんなかえって来てくれるとにぎやかになっていいのにね。」
と申しました。

鶴のお父さんは、一ぷくたばこを吸いながら、足の悪い鶴の笛の音にききとれていました。笛の音色はピヨロピヨロと涼し気な

音色をたてています。

「あら、何だか、にぎやかな羽音がしますよ、誰かかえつて来たのでしょうか。」

やがて、金色の空から、一羽二羽、三羽四羽、村をすてていった鶴たちが笛の音色にさそわれてもどつて来ました。

「誰もいばらないで、みんなでわけあつて食べあう気持ならばかえつていらつしやい。」

足の悪い鶴が申しました。

かえつて来た鶴たちはよろこんで涙を流しました。

それからは、みんな働きに行つて、みんな仲よくわけあつて食べました。——にぎやかな美しい鶴の国はいまもどこかにある

のでしょうか……。

きれいなところがいつもいい、

まずしくてもこころはゆたか、

みんなでわけあって、

みんなで働いて、

いつもきれいなところで、

みんな愛しあってゆきましよう。

鶴の笛は、いつもそういつてピヨロピヨロとやさしくなつていたのです。

青空文庫情報

底本：「林芙美子全集 第十五卷」文泉堂出版

1974（昭和52）年4月20日発行

入力：林 幸雄

校正：花田泰治郎

2005年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鶴の笛

林芙美子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>